

# 漢代四川の富裕層における死後の世界観

近藤 いずみ

漢代の四川の富裕な人々は、死後の魂の行方について明確な答えを持っていたらしい。その「答え」を、墓祭施設に配された闕という建築物を通して考えてみたい。

## 一、闕の形式・歴史・種類

闕とは、建築群の囲壁の門の両側に設置された木造の高層建築物をいう。比較的古義を残すと思われる『釋名』釋宮室は、「闕は欠と通じる。闕は門の両側に建ち、中央に空間があり道になっている」と説明している<sup>①</sup>。

闕には、門の前面に一本だけ建てられる単闕と、門の両脇に建てられる双闕の二つの建築形態がある。また正闕のみのものは単体闕、正闕の傍らに子闕が付設された闕は、子母闕と呼ばれる（図1）。

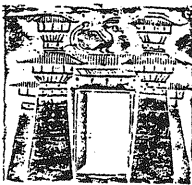
史苑（第五七卷一号）



a - 単闕



b - 単体闕の双闕



c - 子母闕の双闕

図1 闕の種類

闕は、新石器時代頃部落の囲壁の開口部に建てられた防衛と遠望の為の単純な木楼がその雛型であろうと言われている<sup>②</sup>。この木楼は徐々に発展し、城門や宮殿の門の脇に設置されるようになる（城闕・宮闕）。『詩經』鄭風、子衿の城闕に関する記述が、闕が文献に登場する最古の例である<sup>③</sup>。城壁や宮殿など権威ある場所に設置された為であろう、闕は次第に権威を象徴するものとなっていく。

前漢初期には、臣下の邸宅の前に邸宅闕が建てられる様になる。更に前漢後期には祠廟や墓域の前面にも闕が建てられ、また墓室の中にも闕の画像が飾られるようになった。

しかし魏晉南北朝時代以降、闕は急速に衰退する。まず隋・唐代に城闕・邸宅闕・祠廟闕が消える。（墓闕は陵墓）にしか建てられなくなり、宮闕も門と壁から離れ前面にせり出すという風に形状が大きく変化した。宮闕の変化は、闕の“権威の象徴”という機能が薄まり、門前に置かれた展望台に過ぎなくなった事を示唆するものであろう。その後、陵墓の闕も元代に廃止される。宮闕のみ清代まで残るが、闕の存在意義は既に失われていた。

こうして見ると、闕は前後漢代という限られた期間でのみ流行した建築物と言えるだろう。その漢代に、闕に与えられていた最大の機能は“権威の象徴”となる事であった。そして、四川の墓闕には、この象徴性が最も強く現れていると思われるのである。

これまでは資料不足のため、墓闕に関する論文は、形態や銘文の分類記述など簡単な内容に留まるものが多く、その機能や象徴性について一歩踏み込んだ考察が加えられることはなかった。しかし近年、四川に現存する二十の墓闕の現況と詳細な実測図及び画像が、一冊の本にまとめられ発表された。不明な部分も少々残るが、この新しい資料の

発表によって、複数の墓闕の画像を詳しく検討することが可能となった。この資料を手掛かりに、“権威の象徴”たる闕がなぜ墓域に建てられたのか、また墓主の魂が目指した“あの世”はどのような世界だったのかを考えてみたい。

## 二、“天門”と呼ばれた闕

現存する闕は、中国全土で石闕ばかり二十八闕、うち二十闕が四川に集中する。河南の三闕と山東の武氏祠闕が祠廟闕で、残りは全て墓闕である。墓闕とは祠堂など様々な墓祭施設と共に一つの墓域を構成するもので、普通墓域の入口に左右一対で建てられた。

墓闕や墓室内の闕については、従来「漢代では二千石以下の者が墓前に闕を建てる事は禁止されていたのだから、これらの闕は生前墓主の館に実際に建てられていた邸宅闕を表すものであろう」という馮漢驥氏の説が有力とされてきた。だが唐長寿氏が指摘する様に、二千石以下の人物も墓前に闕を建て墓室内に闕を飾っている事などを考えると、墓域内の闕が墓主の生前の身分を表示するためだけのものではない事は明白である。では、墓域に配された闕は一体何を象徴しているのか。

墓は死者の世界である。墓域に配された闕は、墓域の入

口を示すと同時に、その背後に広がる死者の世界の入口と死者の世界の神聖さを象徴するものだったのではないか。

遠望や防衛のための単純な木楼から出発した闕は、城闕や宮闕に発展するに及んで権威を示す性格を付与され、闕の内部は権威に満ちた犯すべからざる場であると考えられるようになる。権威の象徴という機能が大きくなった結果神聖なるあの世の入口にも闕が建てられる事になったのであろう。

四川省簡陽県で出土した鬼頭山三号石棺の側面部には、闕の画像と共に「天門」という銘文が刻まれていた。闕はやはり天の門＝異界の入り口と考えられていたのである(図2)。同省巫山県から複数出土しているという銅牌でも、仙人の門番が守る闕に「天門」という銘文が付されている<sup>⑩</sup>では、天門とは具体的にはどのようなものと考えられていたのであろう。

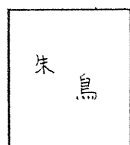
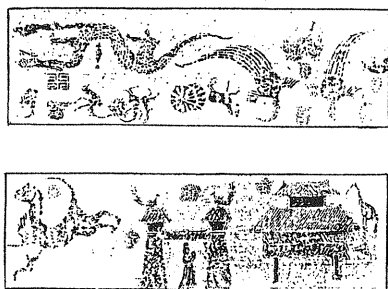
戦国時代の老荘家は、「天門」を非常に哲学的な「無<sup>⑪</sup>道」のイメージで捉えていたらしい。一方『楚辞』九歌大司命には、文字通り「天の門」としてイメージされた天門が登場する<sup>⑫</sup>。その他、二例を挙げると、

「西北荒中有二金闕、高百丈、上有明月珠、径三丈、光照千里。中有金階、西北入両闕中、名曰天門」(『太平御覧』卷一七九 居處部七、闕部下所引、『神異経』「西北荒経」)

史苑(第五七巻一号)

「大荒之中有山、名曰日月山、天樞也。呉姬天門、日月所入」(『山海経』第十六、大荒西経)

戦国時代から漢代まで、天門は様々な姿で捉えられていたが、概ね「天上の門」と考えられていたようだ。だが、古くは天門の別名であった「閭闔」<sup>⑬</sup>が崑崙山の門の名前と考えられるようになる<sup>⑭</sup>に、この頃から既に、天門は、戦国時代頃に登場し前漢以降西王母と結びつき爆発的な信仰を集めるようになった聖山・崑崙山の方へと引き寄せられ始めるのである。土居淑子氏は、このような変化が「戦国という分裂の時代から、秦漢の統一の時代へと移り変わっていった歴史の動向」に



(棺頭)



(棺尾)

図2 鬼頭山3号石棺

起因すると指摘している。<sup>⑬</sup>但し「天門」の持つ異界へのゲートというイメージは、変化していないと見て差し支えないだろう。

では、この天門たる闕は、如何なる思想的基準の下、墓域や墓室内に配されたのか。

### 三、墓闕に描かれた画像

四川の墓闕は、木造の結構を精密に模す外観や画像内容等、非常に独特である。

画像は主に櫓部と闕身上部に施されるが、最も重要な画像は正面部の最上段を飾った画像であろう。墓闕が象徴していたものは一体何か。この問題を、画像が比較的是っきりわかる十一の闕の正面部最上段の画像を通して考えたい。なお便宜上、ここでは拓本や実測図をもとに論者が作成した図によって論を進める。以下画像の説明はこの図をもとに行うが、この図の層数と実際の闕における層数とは異なる場合がある。また、この図では画像同士の繋がりを最重視したため、斗拱や台基、頂蓋、闕身下部等は省略した。更に、櫓部と闕身の間の角神は、その有無を明確にするため、人型の角神があった場合は実際の形状とは関係なく適宜人型の絵を入れた。各闕の正確な画像内容や形状等は、

『四川漢代的「石闕」』などの資料を参照してもらいたい。

綿陽 楊氏闕（平楊府君闕）（図3）：左闕右闕共にほぼ完全に現存する。闕身下部は地中に埋没。上部には六朝梁代の仏像や仏龕が多数施されている。高さ約五・二m。建造年代は一九〇〇～一九五年。東北に面す。

#### ◎右闕（東闕）

第一層、正面部中央の画像は山岳と女性と大鳥。中央の山の傍らに横長の頭飾りを戴いた女性が立ち、隣の山の上に立つ大きな鳥に向かって手招くような仕草をしている。玉勝に似た頭飾りを付けている事、神山に抛り大鳥（但し二本足）を供にしているらしき事、正面部最上段に配されている事などから、西王母である可能性が極めて高いと考えられる。<sup>⑭</sup>

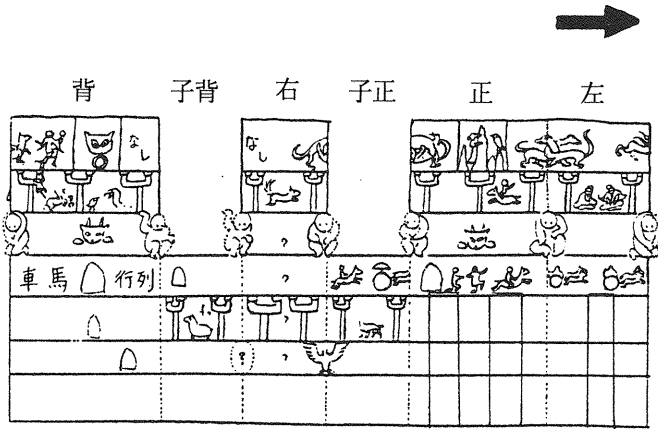
第二層、正面部や背面部、右側面部には獣や人物等。左側面部は伯牙彈琴図である。

第三層は縦横に組み合わされた斗拱の層。四隅を角神が支える。正面部と背面部に横木を噛む魔除けの獸頭―鋪首―が配される。

第四層には、一連なりの車馬行列が、闕の内側に入り込む様に描かれる。正闕正面部で四維の馬車に乗るのが、行列の主人たる墓主であろう。この層には、墓主の魂が死後

図3 綿陽 楊氏闕（右闕）

史苑（第五七卷一号）

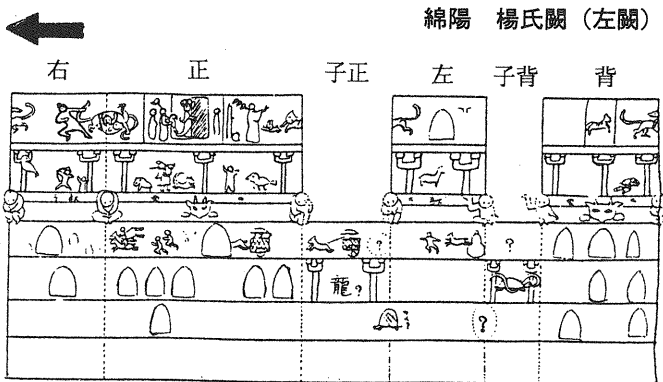


※闕身部以下略

※図の上の「右、正、子背」等の文字は、右→右側面、子正→子闕正面部を表す。また、図の横に⇔がある方が闕の内側になる。

の世界へ向かう様子が描かれているのである。  
第五〜七層は動物等。以下は画像なし。  
◎左闕（西闕）

第一層。正面部の中央には半開きの扉が描かれ、扉から



※闕身部以下略

は裾が舞い上がった長衣を着けた双鬘の仙人が半身を覗かせている。また、扉左側には二人の人物が立ち、内一人は右手に旒（ぼう）に左手に鳥を持っているという（拓本未発表）。旒は使者の持ち物である。とすると、この人物は、何かを



（左闕）  
第1層  
正面部



（右闕）  
第1層  
正面部

漢代四川の富裕層における死後の世界観（近藤）

告げに最上段の扉までやって来た使者ということになるであらう。

第二層。鳥や弓を構える人物、動物等。

第三層は斗栱と角神。上部の横木には万獸雲布図があったが、判別不可能。

第四層は墓主の昇仙ための車馬出行図。

第五〜七層は、仏像と風化のため判別不可能。第八層以下は画像なし。

徳陽 司馬孟台闕（上庸長闕）（図4）…右闕正闕のみ。

闕身は一本石。後漢中期〜後期の建造。高さ約二・八m。西北に面す。

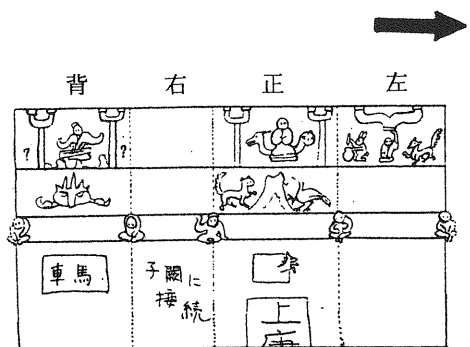
# ◎右闕（東闕）

第一層。正面部の画像は龍虎座に座る人物である（拓本未発表）。この闕は東闕だが、綿陽楊氏闕でも東闕正面部最上段に描かれていたのは西王母であった。この墓闕における最重要部分を飾る龍虎座の人物も、やはり西王母であろう。なお、左側面部は九尾の狐と玉兔、背面部は伯牙弹琴図等。

第二層、正面部は山岳と三足鳥と四足の獸。背面部は鋪首。

第三層は斗栱と角神。

第四層。上部枳内部に人馬が描かれる。正面部には「上庸長」の三字が残っている。



※闕身部以下略

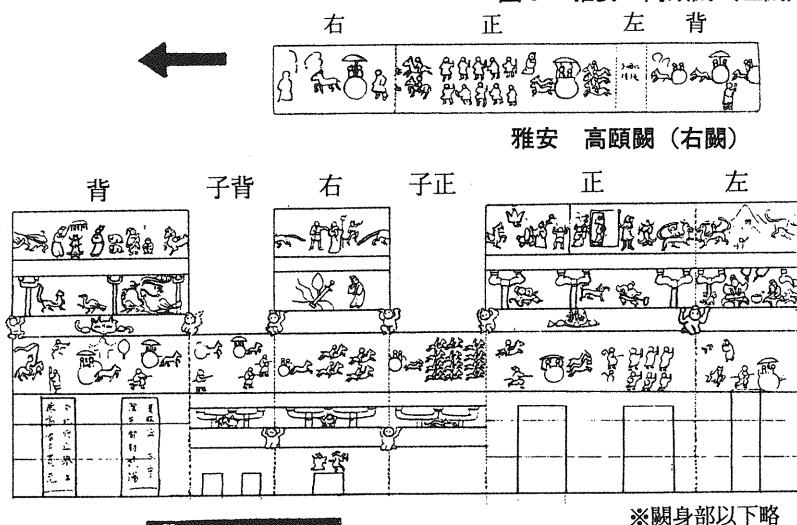
図4 徳陽 司馬孟台闕

雅安 高頤闕（図5）…左闕右闕共に現存（左闕は正闕闕身の一部のみ）。高さ約五・九m。南東に面す。墓主の没年の建安十四（二〇九）年頃の建造か。

# ◎左闕

各側面とも、左方向（闕の内側）へ向かって進む車馬行

図5 雅安 高頤闕（左闕）



第1層正面部

列。

◎右闕

第一層、正面部中央は半開の扉。扉から仙人が半身を覗かせる他、扉左右にも人がいる。扉左側の人物は、使者の印たる旄と鳥を持って跪き、内部の仙人に話しかけている。綿陽 楊氏闕でも正面部最上段の画像は「半開の扉と半身を覗かせる仙人、仙人と言葉を交す使者」であった。この半開の扉を中心とした画像は複数の闕で見られ、どの闕でも必ず正面部最上段の中央に配置される。つまり、この画像こそ、墓闕上の様々な画像の中で、最も重要な画像の一つなのである。

なお、背面部中央は周公輔成王図と似ているが、子供が仙人の姿をしている等、一般的な周公輔成王図とは異なる点が多い。

第二層。万獸雲布図だが判別は不可能。

第三層。正面部は虎と戦う人物等。左側面部は伯牙彈琴図、右側面部には季扎贈劍図<sup>18</sup>。背面部には鳥や仙木、三足鳥と九尾の狐。

第四層は斗拱と角神と鋪首。

第五層は、右方向に進む車馬行列。

第六～七層には人物等。以下画像なし。

漢代四川の富裕層における死後の世界観（近藤）

渠渠 沈氏闕（図6）：左右両闕とも正闕のみ現存。高さ約四・八五m。南東に面す。建造年代は一二二―一二五年頃。

#### ◎右闕（西闕）

第一層の正面部の画像は、一角獣もしくは鹿に乗った被髪（びはつ）の仙人と絡み合った仙木。

第二層は万獸雲布図。正面部の龍虎座には、玉勝を戴く西王母が座っている。

第三層は斗拱と角神。正面部に鋪首。

第四層。左側面部（闕の内側）、上部の横木から吊られた壁にリボンが結ばれ、それを白虎が引っ張っている。正面部は朱雀と銘文と鋪首。その他の側面は画像なし。

#### ◎左闕（東闕）

第一層。正面部には鹿に乗る仙人と薬を撞く玉兔が描かれている。背面部は董永侍父図、右側面部は虎や人物。左側面部は剥落。

第二層。右闕同様全体を万獸雲布図が埋め、正面部中央には龍虎座に座る人物が描かれている。右闕の西王母の玉勝に対し、左闕の龍虎座の人物がつける冠は中央部が突起したもので、東西で明確に人物が描き分けられている。左闕の龍虎座の人物は、方角に従い東王公と考えるべきであろう。これは四川で東王公が描かれた非常に珍しい例とい

える。

第三層は斗拱と角神、正面部に鋪首。

第四層の正面部は朱雀と銘文、下部は剥落。右側面部は、上から吊られた壁に結ばれたリボンを啜（く）える青龍。背面部は画像なし。

渠渠 蒲家灣無銘闕（図7）：左闕正闕のみ現存。建築細部や画像は沈氏闕によく似る。後漢中期〜後期の建造で沈氏闕より僅かに遅いか。高さ約四・七m。南東に面す。

#### ◎左闕（東闕）

第一層。正面部は旄（はたけ）を持ち一角獣に乗る仙人と玉兔。背面部は董永侍父図<sup>20</sup>、側面部は右が虎と人物、左は全壊。

第二層は万獸雲布図。正面部中央には両端が突起した冠をつけた人物が龍虎座に座る。画像の内容や配置が酷似する沈氏闕と同様に、ここでもこの人物は東王公と考える。

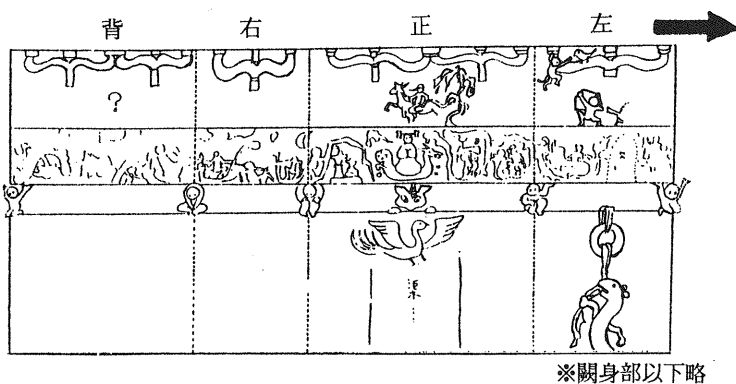
第三層は斗拱と角神と鋪首。

第四層。正面部、朱雀の下は剥落。右側面部は壁とリボンと青龍。他は画像なし。

渠渠 趙家村一号無銘闕（図8）：左闕正闕のみ現存。造形や画像内容は同村二号無銘闕や王家坪無銘闕に近い。後漢末期〜西晋の建造。高さ約四・五m。南東に面す。



圖 6 渠 渠 沈氏闕 (右闕)

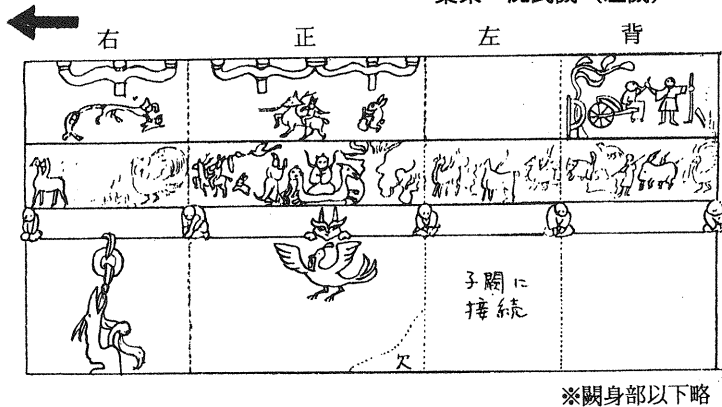


第 2 層万獸雲布図

(右闕)



渠 渠 沈氏闕 (左闕)



(左闕)



第 2 層万獸雲布図

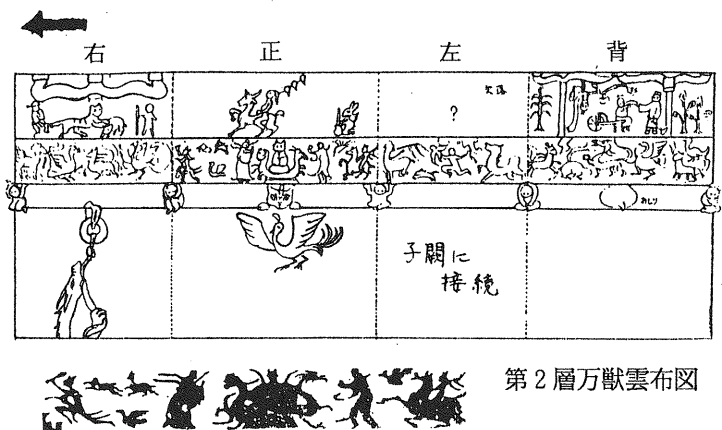


図7 渠県 蒲家湾無銘闕（左闕）

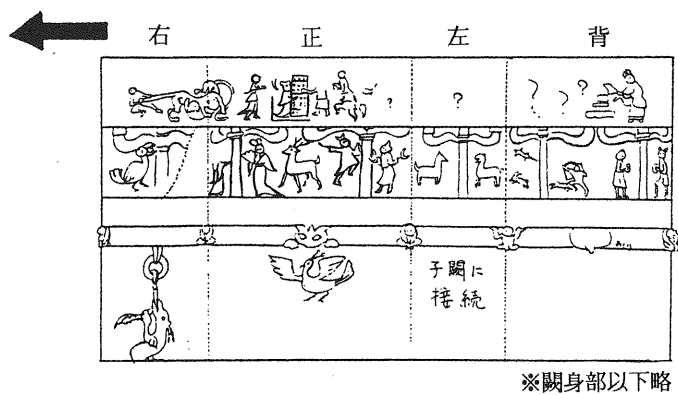


図8 趙家村一号無銘闕

◎左闕（東闕）

第一層。正面部中央は半開の扉と内部の仙人。扉左右にも数人の人物がいるらしい。右側面・背面部は模糊とし、左側面は全壊。

第二層。正面部は、鹿とその左右にそれぞれ斗拱を挟んで立つ仙人と仙女。背面部は狩獵図と仙人。左右の側面部は鳥や動物等。

第三層は斗拱と角神と鋪首。

第四層、正面部は上部に朱雀。右側面部は壁とリボンと青龍。他の面は画像なし。

渠県 趙家村二号無銘闕（図9）：右闕正闕のみ現存。

高さ約四・三m。東北に面す。同村一号無銘闕と同様、後漢末期～西晋頃の建造と思われる。

◎右闕（西闕）

第一層。正面部中央は半開の扉。扉左側には、三株樹を持った仙人とベルトに剣を挟んだ護衛らしき蟾蜍が立つ。三株樹を持った仙人は使者であろう。ここでは三株樹が扉と同じ役割を果していると思われる。その他の面は虎や人物、樹木、馬車等。

第二層。正面部は鹿に乗った仙人と仙木。背面部は仙人六博、左側面部は弓を構えた人物に玉兔、鳥。右側面は模

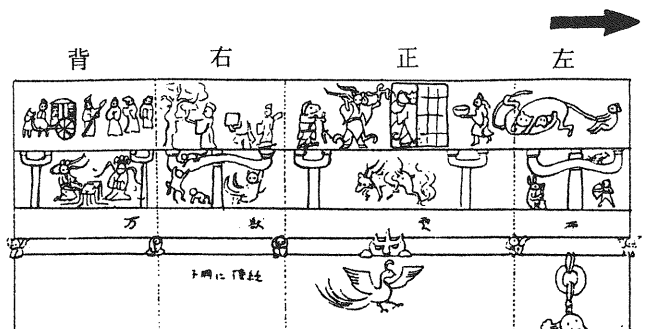
史苑（第五七卷一号）

糊としている。

第三層は万獸雲布図。西王母等はない。

第四層は斗拱と角神と鋪首。

第五層の正面部は上部に朱雀、下部に玄武。左側面部は壁とリボンと白虎。



※闕身部以下略



第1層正面部

図9 渠県 趙家村2号無銘闕（右闕）

漢代四川の富裕層における死後の世界観（近藤）

渠県 王家坪無銘闕（図10）：左闕正闕のみ現存。造形や画像、年代は趙家村の二闕と近い。高さ約四・六m。南東に面す。

◎左闕（東闕）

第一層。正面部はやはり半開の扉。扉左側は旒を持つ仙人、右側には三株樹を持つ仙人等三人の仙人がいる。背面部は荊軻殺秦王図、右側面部は双虎。左側面部も故事図か。  
第二層。正面部は棒を持ち龍に乗る仙人。右側面部は鳥と狩人、左側面部は腹部が円盤になった二羽の鳥、背面部は玉兔と仙人。

第三層は万獸雲布図であるが、全壊。

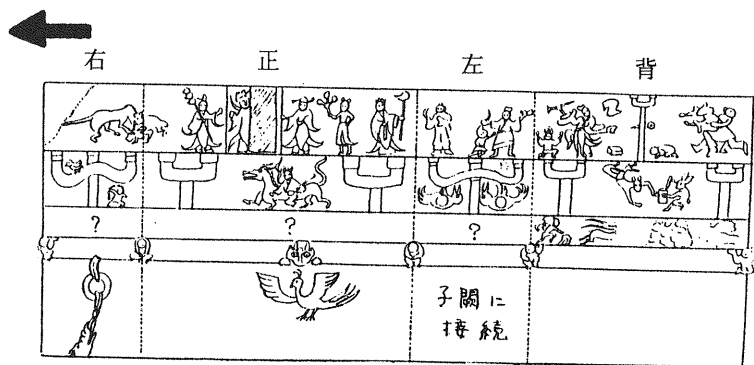
第四層は斗拱と角神と鋪首。

第四層。正面部は上に朱雀、下に鋪首。右側面部は壁とリボンと青龍。

重慶 盤溪無銘闕：両闕共に現存。子闕は元々ない。四川の墓闕に女媧と伏羲が描かれた唯一の例だが、闕身が一本石で造られる、闕身内側に青龍・白虎を配す等、渠県諸闕との共通点が見いだせる。高さ約四・一五m。西向き。後漢後期頃の建造か。

◎右闕（北闕）

檐部には画像はない。檐部最下部を角神が支える。闕身



※闕身部以下略



第1層正面部

図10 渠県 王家坪無銘闕（左闕）

左側面部には壁とリボンと白虎が、右側面部には月輪を掲げる人首蛇身の女媧が描かれている。

#### ◎左闕（南闕）

檐部は現存せず。闕身右側面部は壁とリボンと青龍。左側面部は日輪を掲げる伏羲。

忠県 湴井溝無銘闕：右闕のみ現存。子闕は元々ない。

画像は闕身左側面部の白虎のみ。檐部が二段の墓闕は忠県以外では例がないが、画像磚には多い。建造は後漢中期、後期。高さ約五・六六m。南西に面す。

忠県 丁房闕：両闕共現存するが、漢代のものは、半開きの扉と半身を覗かせる人物が描かれた左闕の upper 段檐部のみと思われる。本来の建造年代は後漢中期、後期か。高さ六・二六m。現在は南東を向く。

以上の十一闕を基に、四川の墓闕を川西・川東・忠県の三タイプに分けてみたい。

川西タイプには成都を中心に雅安から梓潼までの縦長に広がった地域の闕、川東タイプは渠県の諸闕及び重慶の盤溪無銘闕が、忠県タイプには忠県の闕が分類される。

川西タイプは基本的に闕身が幾層かの石材に分かれ、高

さは五メートル強ほど。川東タイプは闕身が一本の石材で造られ、一般に川西タイプより少し低い。忠県タイプは闕身が細く檐部が二段で、画像は極端に少ない。

画像上の特徴としては、川西タイプには車馬行列が描かれる事、川東タイプには闕身の内側に必ず青龍と白虎が配される事が挙げられる。重慶の盤溪無銘闕は、基本的な造形の類似の他、この闕身内側の青龍と白虎があるため川東タイプに入れた。但しこれは忠県の湴井溝無銘闕にも見られるので、四川省東部一帯の闕の特徴なのかもしれない。

故事図は、川西タイプでは伯牙弹琴図、川東タイプでは荊軻や董永等、義士や孝子の図が好まれたようである。後漢代には、彼らの徳高い行動は天をも動かすと考えられていた。これらの故事図が高位置に配されたのは、墓主がこれから彼らと同じ一段高い世界の住人となる、という事を示すためであろう。

その他川東タイプの万獸雲布図では、四川では珍しく龍虎座に座る東王公が描かれている事がわかった。但し正面部最上段という最重要箇所には、東闕であっても西王母が配される。また、西王母画像の有無に拘わらず、玉兔や九尾の狐、三足鳥など西王母の眷属はほぼ全ての闕で見られる。特に不老不死の薬を搗く玉兔は、単独で第一層か第二層という高い場所に配される場合が多い。これは、不老不

#### 漢代四川の富裕層における死後の世界観（近藤）

死の業を管理する西王母の機能を、玉兔が代理で象徴しているためであろう。

このように西王母の地位が非常に高かったのは、この世での生を終えた墓主は西王母から新しい「生」を与えられ仙界で永遠の命を享受する、と信じられていたからに他ならない。墓闕は、その西王母が主催する永遠の仙界への入口を象徴していたのである。

墓闕正面部最上段に描かれた半開の扉は、その事を最もよく表している。扉内部の仙人と言葉を交わす人物は、殆どの場合使者の印である旒を手をしている。扉がなく、旒を持つ使者のみが描かれる場合もある。墓主の行列の先触れであろうこれらの使者は、一足早く最上部の扉を叩き、その奥の仙界に向かって間もなく墓主が到着する旨を告げているのである。墓闕正面部最上段に描かれた半開の扉は、西王母の許へ通じる扉なのである。

墓闕に描かれた画像から、墓闕が死後の魂が目指す西王母の世界の入口の象徴であった事がわかった。次に昇仙のより詳しい過程を、画像磚墓及び石棺画像から見てみよう。

#### 四、画像磚墓の闕

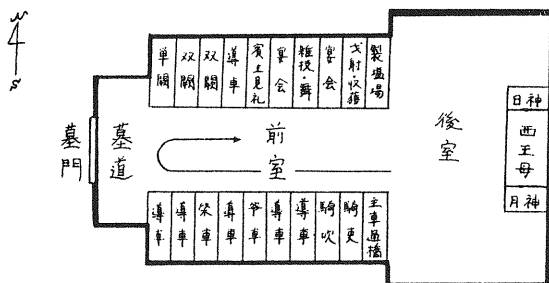
成都市北郊の昭覺寺画像磚墓は、前室の南北両壁に各十

枚、後室の後壁に三枚嵌め込まれていた画像磚の、全ての配置がわかる珍しい例である。（図11）。

画像は墓門寄りから順に、南壁が、導車―輜車―導車―斧車―導車―導車―騎吹―騎吏―主車過橋。北壁は、単闕―双闕―双闕―導車―賓主見礼―宴会―宴会―弋射收穫―製塩場と並ぶ。南壁画像は墓主の魂が仙界へ渡る出行図なのである。行列の最後方、橋を渡る四維の馬車の人物が行列の主人たる墓主である。南壁を走り抜ける墓主一行は墓門付近で右折し更に北壁に進んで行く。一行の目的地は北壁中央の館であるらしい。なぜなら北壁の闕の次に、墓門を背に館に向かって走る導車が描かれているからである。北壁には、仙界へ入って来た墓主が仙界の館で歓迎される様子が描かれているのである。そしてその奥、後室後壁の一際高い位置には、両脇に日神月神を従え、玉兔や九尾の狐等の眷属に囲まれて龍虎座に座す西王母と、寄り添いあう男女（墓主夫妻）、夫妻に向かって平伏する衣冠を正した人物等が描かれている。

各画像を一連なりのものとして見ると、墓室内の画像磚が「闕を通して西王母の許へ至る」という墓主の魂の昇仙のストーリーに沿って配列されている事がわかる。その筋書に従って、この墓室の画像を読み直してみよう。

「多くの供を従え、墓主が仙界へ渡って来る。行列は闕



※ほぼ同じ内容と思われる画像磚で大まかに配置してみた。



図11 昭覚寺画像磚墓

を通り抜け仙界へ入る。双闕の門は墓主を歓迎する様に既に半分開いている。闕内部（＝仙界）の住人と挨拶を交わした墓主は、舞や雑技が行われる宴会で歓迎される。館の外には穀物や魚、鳥、製塩場に恵まれた豊かな田園が広がり、墓主の仙界での新生活の安泰を約束している。

やがて墓主は、夫婦連れ立って西王母との謁見に赴く。

仙界の官僚からの恭々しい挨拶を受けた墓主夫妻は、西王母の仙界の一員となり、永遠の命を手に入れたのである。

この様な墓主の昇仙の筋書に則った画像の配列基準は、他の画像磚墓にも共通する。

羊子山十号墓は墓道両壁に各一枚、前室両壁に各六枚、画像磚が飾られていた（図12）。

北壁は墓道に単闕、前室は墓門寄りから、不明―不明―不明―騎吏―主車過橋―馬車と騎吏。南壁は墓道に単闕、前室は製塩場―式射收穫―不明―宴会―宴会―双闕となる。この墓は墓道両壁に一つずつ単闕を配しているが、こうする事により双闕を表しているのであろう。

墓主一行は北壁後方からやって来て、墓道の闕を通り抜け、豊かな田園が広がる仙界へ入っていく。田園の先には館があり、館に到着した墓主は盛大な歓迎を受けるのである。前室北壁の欠落した三枚には、墓主の護衛となる騎馬部隊が描かれていたに違いない。また、欠落した南壁第三

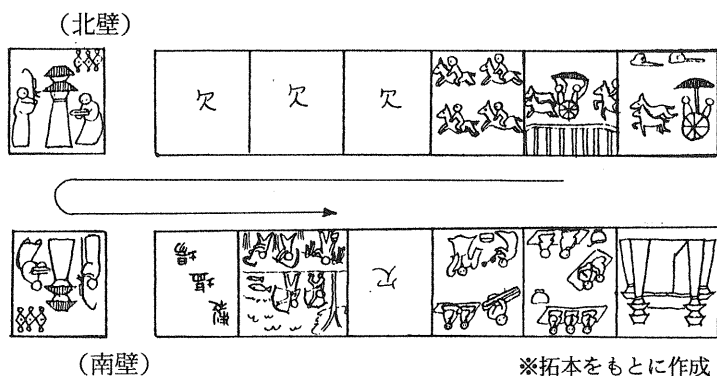


図12 羊子山10号墓

石の画像は、雑技等が行われる宴会の図であったと思われる。

さて、ここまでは昭覺寺画像磚墓とはほぼ同じ配列である。では宴会図の次、南壁最後部の半分扉の開いた双闕図は何を示しているのか。この仙界の一番奥に建つ双闕の扉は、仙界に辿りついた墓主が最後に行くべき場所に向かって開いているのである。

昭覺寺画像磚墓では、宴会で饗応された後、墓主は夫婦連れ立って西王母との謁見に赴いていた。ここでも墓主は、最後に西王母のもとへ向かうに違いない。仙界の最深部に聳える闕の奥には、仙界の心臓部ともいうべき西王母の宮殿があるのであろう。この墓には西王母画像はない。しかし墓壁画像の最後尾に配された双闕図が、その奥に西王母が鎮座している事を暗示しているのである。

羊子山一号墓は、墓道両壁に各四枚、前室両壁に各四枚、墓道と前室の間のアーチ部分（前室門）両壁に各一枚、画像磚と画像石が嵌め込まれていた（図13）。

この墓は、多数の車馬の進行方向が違うため画像同士の繋がりが掴みにくい。墓道と前室で場面を分けると、前述の二墓と同様の流れで画像が配列されている事がわかる。まず墓道。西壁は墓門寄りから、単闕一騎吹一四維の馬車一騎吏で、東壁は単闕一車馬一騎吏一弋射收穫と並ぶ。



墓道には、闕を通り抜けた墓主に続いて行列の後方も今まさに闕をくぐろうとしている……という場面が描かれているのである。車馬行列の後ろ、東壁第四石の弋射收穫図は、闕の外の世界ではなく、前室門東壁の製塩図同様、仙界の田園風景を表しているのであろう（前室門西壁は欠落）。そして、闕をくぐった墓主一行は方向を転換し、前室の西壁を走り抜け、東壁中央の館に辿り着くのである。

この墓では西王母や西王母の宮殿へ続く闕は描かれない。しかし、画像全体の流れから考えれば、墓主が辿り着いたのはやはり西王母の仙界と見るべきであろう。

墓室画像においても、闕は墓主が目指す西王母の仙界の入口を表していた。最後に、石棺の画像を検討してみよう。

## 五、石棺の闕

まず、前述の鬼頭山三号石棺を見よう（図2）。この石棺には白虎等の四神や女媧・伏羲、双闕、食糧庫、馬車、人首鳥身の日月神等多くの画像が施され、全画像に銘文がつく。「天門」が西王母の仙界の入口に建つ闕を指す事は今まで見た通りである。ここには、神々や聖獣、無尽蔵の食糧庫に守られた仙界と、その入口の闕を目指してやって来る墓主の魂の乗る馬車等が描かれているのである。

史苑（第五七巻一号）

榮経県出土石棺では、墓主は既に仙界の館へ辿り着いた後のようだ（図14）。何故なら一方の側面で、馬が装備を解かれ休息しているからである。もう一方の側面は、中央に半開の扉と双鬚の仙女、扉左側の部屋には接吻を交わす墓主夫妻、右側の部屋には玉勝をつけた西王母が描かれている。画面中央の半分開いた神秘的な扉は、墓闕正面部最上段の半開の扉や羊子山十号墓の双闕の扉同様、やはり西王母の許へ続く扉だったのである。

瀘州十二号石棺でも、龍虎座に座る西王母と墓主夫妻が共に描かれている（図15）。側面部、朱雀の後方で侍者を侍らせた男女が手を握り合っている。男女の上方にある「東海太守良中李少君」という銘文から、この二人が墓主の李少君と彼の妻であると知れる。

この様な例から石棺画像は基本的に、棺頭には仙界のゲートたる闕、棺尾には女媧・伏羲など辟邪の機能を果すもの、側面には西王母や墓主夫妻、仙界の風景や四神等を配するという配列が考えられていた事がわかる。

芦山県出土の王暉石棺はこのパターンが最もシンプルになった例で、左右側面には青龍と白虎、棺尾には玄武しか描かれない（図16）。但しこの石棺の棺頭には、闕ではなく墓闕正面部最上段と全く同じ半開の扉と仙人が刻まれている。つまりここでは、天門たる闕ではなく、天門を象徴

図13 羊子山1号墓

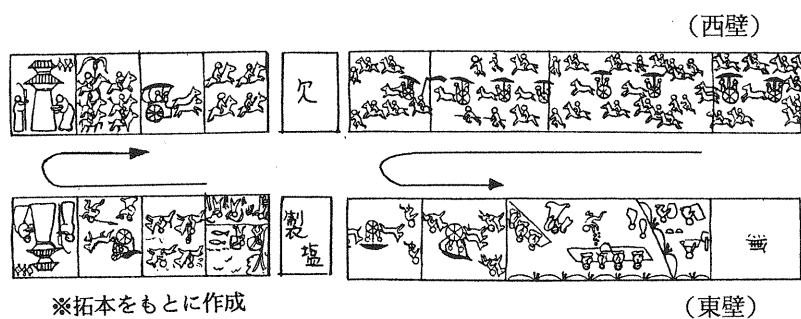


図14 瀘州  
12号石棺

図15 栄経県  
出土石棺



図16  
王暉石棺

する墓闕の最重要画像である半開の扉が棺頭に配されているのである。

墓域に配された闕は、常に「仙界の入口」を象徴していた。だからこそ、石棺という小世界のゲートにあたる棺頭には闕が描かれたのである。石棺画像は、墓主の昇仙のダイジェスト・ストーリーと言えるだろう。

## 六、最後に

西王母とその眷属、墓主の魂を運ぶ車馬、宴会や雑技、再会を喜ぶ墓主夫妻、四神、様々な聖獣達……。墓闕や墓室、石棺には多くの画像が描かれた。それらは無秩序に並べられていた訳ではなく、「西王母の許へ昇仙し永遠の命を手に入れる」という墓主の昇仙ストーリーに沿って配置されていたのである。

漢代、四川に暮らす富裕な人々にとって、死は新しい生の始まりであった。生者は死者のために冢を築き闕を建て、墓室内を華麗な画像で飾り立てた。死者たちは隊列をなして馬車を駆り「天門」へと向かう。彼らの望みは、西王母から不死の薬を授かり、その仙界で永遠の生を楽しむ事だったのである。

その永遠の生は、同時に豊かな生でなければならなかった

た。仙界で暮らす墓主が飢える事があってはならない。そのため墓には収穫や製塩場、倉、機織り等の図が熱心に描かれた。また、永遠の生は孤独な生でもなかった。夫婦は死して後必ず再び巡りあい、仙界で共に永遠の生命を楽しむのである。

その豊かで美しい仙界の入口には、「天門」と呼ばれる闕が建っていた。あの世とこの世の境目である墓域に配された闕の内側には、西王母の仙界が広がっていたのである。

四川では、墓域に配された闕に一貫して強い聖性が与えられ続けた。この、他の地域の闕には決して見られない濃厚な神秘的雰囲気こそが、四川の闕を、ひいては四川の文化を特徴づけるものであったといえるだろう。

最後に、漢代の四川という地域が持っていた文化の特殊性について触れておきたい。

まず、四川には神仙世界に対する非常に強い傾倒が見られる。特に西王母は一貫して森羅万象の支配者として扱われた。東王公という配偶神を受け入れた山東の西王母などとは違い、後漢末期に至っても至高神の地位を失わなかった四川の西王母は、より古い西王母信仰の形を残していたのではないか。

また、神仙世界への傾倒が強い一方、その仙界の風景には、宴会や雑技、塩井、穀物の収穫等、当時の四川の生活

が非常に写實的に描き出されている点も大きな特徴である。

もう一つの特徴は、親密に抱き合う墓主夫妻の像が数多く出土している点である。他地域では、四川の様に接吻をしたり全裸で抱き合う墓主夫妻像は見られない。特に儒教色が濃い山東のものとは大きく異なる。この様な墓主夫妻像は、四川の文化が持つおらかさをよく表すものと言えるだろう。

おおらかという特徴は、四川の画像磚の画風にも表れている。極度に様式化された山東の画像石などにはない、伸びやかな画風と優れた写実性が、四川の画像磚を非常に魅力的なものにしているのである。

漢代の四川は明らかに中原地方とは異なる文化の薫り発していた。それは、一つに四川が西南少数民族地帯と隣接している事によるであろう。またこの地域が楚の文化の影響を強く受けていた事も指摘されている。四川の漢代の画像磚・画像石を読む時、その根本となる文化的背景をどの様に読み解いていくかという事が、今後に残る大きな課題である。

註

- (1) 「闕、闕也。闕在門兩旁、中央闕然為道也」
- (2) 「縱我不往、子寧不來、挑兮達兮、在城闕兮」
- (3) 徐文彬「門闕考——并及四川石闕史略」『西南師範大學學報』一九八六年第二期
- (4) 「設兩闕、天子之礼也」何注「天子諸侯台門、天子外闕兩闕、諸侯內闕一闕」(『公羊伝』昭公二十五年)や、「門必有闕者何。闕者、所以釋門、別尊卑也」(『白虎通義』)等から、闕が身分の象徴であった事がわかる。
- (5) 注(3)・(8)の他、陳明達「漢代的石闕」『文物』一九六一年第六期、朱曉南「闕的類型及建築形式」『四川文物』一九九二年第六号など。
- (6) 重慶市文化局、重慶市博物館他編著「四川漢代的石闕」文物出版社、一九九二年
- (7) 墓闕の現存数は論者によって一致しない。ここでは各論文を基に、確実に漢代のものとなる闕を選び、二十八闕とした。
- (8) 馮漢驥「四川的画像磚墓及画像磚」『文物』一九六一年第一期
- (9) 唐長壽「漢代墓葬門闕考辨」『中原文物』一九九一年第三期
- (10) 趙殿增、袁曙光「天門考——兼論四川漢画像磚(石)的組合与主題」『四川文物』一九九〇年六期
- (11) 「有乎生、有乎死、有乎出、有乎入、入出而無見其形、是謂天門、天門者、無有也万物出乎無有」『莊子』卷二十三、雜篇、庚桑楚篇など。老莊家における天門の解釈については、

福永光司氏の『老子』（『中国古典選』朝日新聞社、昭和四十三年）に詳しい。

(12) 「広開兮天門、紛吾乘兮玄雲、令飄風兮先驅、使涓雨兮灑塵」

(13) 「閭闔天門也」『說文解字』など。

(14) 「傾宮・旋室・縣圃・涼風・樊桐、在崑崙閭闔之中」（『淮南子』卷二、墜形訓）等。

(15) 土居淑子『古代中国の画像石』同朋舎出版、一九八五年

(16) 西王母は、彼女の為に食事を運んで来るという三本足の鳥（三足鳥）や、不老不死の薬を撞く玉兔、九尾の狐や蟾蜍など、様々な動物を眷属として従えている。画像石では、これら眷属や「玉勝」と呼ばれる特殊な形の頭飾りの有無が、西王母画像を判別する際の目安になる。

(17) 「呂氏春秋」十四、本味など。

(18) 「礼経」學術など。

(19) 「史記」卷三十一、吳太伯世家。

(20) 「尚友録」十四等。

(21) 「史記」卷八十六の刺客列伝など。

(22) 後漢代には、女媧は人類の創造主や天地開闢神の地位を失い、伏羲とペアで邪を禳う神と認識されていたのではないが。墳墓では、墓門や墓室門付近には、邪気の侵入を防ぐため武器を持った門番や鋪首等が描かれるが、女媧と伏羲は、時にそれらの画像と組み合わされ、時に単独でこの様な場所に配置される事が多い。日月輪を捧げていても、その機能は日月の運行という宇宙規模のものではなく、邪を禳うという事だったと思われる。

(23) 「東海太守良中李少君」について謝嘉氏は、「現在の四川北

史苑（第五七卷一号）

部にある閬中県の出身だったのではないかと推測している。（瀘州市博物館収蔵漢代画像石棺考釋）『四川文物』、一九九一年第三期）

#### 図版出典及び参考図版

- 図1：高文編『四川漢代画像磚』上海人民美術出版社、一九八七年、図90、93、92
- 図2：内江市文管所・簡陽県文化館『四川簡陽県鬼頭山東漢崖墓』『文物』、一九九一年第三期、図10、11、16
- 図3：重慶市文化局・重慶市博物館・徐文彬他編著『四川漢代的石闕』文物出版社、一九九二年
- 図11：劉志遠「成都昭覺寺漢画像磚墓」『考古』、一九八四年第一期、及び『四川漢代画像磚』、図90、30、39、4、14、75、56、80
- 図12：馮漢驥「四川的画像磚墓及画像磚」『文物』、一九六一年第一期
- 図13：于豪亮「記成都楊子山一號墓」『文物參考資料』、一九五五年第九期
- 図14：高文・高成英「四川出土的十一具漢代画像石棺圖釋」『四川文物』、一九八八年第三期、図1、2、3
- 図15：『四川漢代画像石』、図9、10、11
- 図16：『四川漢代画像石』、図3、6

（一九九六年史学専攻前期課程修了）